

朗 読 文

私が高等学校にいた頃、比較的親しく付き合った友達の中にOという人がいた。その時分から余り多くの朋友を持たなかった私には、自然にOと往来を繁くするような傾向があった。私は大抵一週に一度位の割合で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町に下宿している彼を誘って、大川の水泳場まで行った。

Oは東北の人だから、口の利き方に私などと違った鈍でゆったりした調子があった。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、遂に彼の怒ったり激したりする顔を見る事が出来ずにしまった。私はそれだけでも充分彼を敬愛に備する長者として認めていた。

彼の性質が鷹揚である如く、彼の頭脳も私よりは遙に大きかった。彼は常に当時の私には、考への及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもっていないが、好んで哲学の書物などをひもといた。私はある時彼からス Pensar の第一原理という本を借りた事を未だに忘れずにいる。

空の澄み切った秋日和などには、よく二人連れ立って、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行った。そうした場合には、往来へ堀越しに差し出た樹の枝から、黄色に染まった小さい葉が、風も「ないのに、はらはらと散る景色をよく見た。それが偶然彼の眼に触れた時、彼は「あつ、悟った」と低い声で叫んだ事があった。唯秋の色の空に動くのを美しいと観ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴として怪しい響きを耳に伝えるばかりであった。「悟りというものは妙なものだ」と彼はその後から平生のゆったりした調子で独言のように説明した時も、私には一口の挨拶も出来なかった。彼は貧生であった。大観音の傍に間借りをして自炊していた頃には、よく干鰯を焼いて侘しい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子の代わりに煮豆を買って来て、竹の皮のまま双方から突っ付き合った。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思った。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたくもしれない。彼自身は無論平気であった。それから何年かの後に、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行ったが、任期が充ちて帰るとすぐ又内地の中学校長になった。それも秋田から横手に移されて、今では樺太の校長をしているのである。去年上京したついでに久し振りで私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取った私は、すぐにその足で座敷へ行って、いつもの通り客より先に席に着いていた。すると廊下つたいに部屋の入口まで来た彼は、座蒲団の上にきちんと座っている私の姿を見るや否や、「いやに澄ましているな」と言った。

その時向こうの言葉が終るか終らないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑って出てしまった。どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それ程拘わらずに、するすると私の喉を滑り越したものでろうか。私はその時透明ないい心持ちがした。